

農作物の少雨対策

平成21年6月4日 環境農業推進課

水稻

○早生水稲

- ア. 収穫前の落水時期は、「南国そだち」、「ナツヒカリ」は出穂後20日頃、「コシヒカリ」は同25日頃を目安として、収穫作業に支障のない時期まで灌水を行う。
- イ. 出穂後10日以降は間断灌水として、根の活力を維持する。

○普通期水稻

- ア. 移植後土壌表面が露出すると、除草剤の効果も無くなり、雑草の発生が多くなるため、できるだけポンプなどを用いて水を入れる。
- イ. 畦畔からの水漏れを防ぎ、水持ちよくする。

露地野菜・花き

- ア. 敷き草や敷きワラ及びマルチングを充分行い、土壌水分を保つ。
- イ. 灌水は、日中を避け朝夕に行う。川水を灌水すると、ショウガでは根茎腐敗病、シントウ、ピーマンでは疫病などの発生する恐れがあるので、これらの品目では使用をさける。また、畦間灌水は湛水ではなくかけ流しで行う。草勢が弱っている場合は薄い液肥を加える。
- ウ. 草勢が弱っている果菜類での収穫は、やや若採りとし、変形果などは早めに摘果して、着果負担を軽くする。
- エ. 乾燥が続くとアブラムシやダニ類、ハスモンヨトウ、ミナミキイロアザミウマ、アワノメイガ、オオタバコガなど害虫の発生が多くなるので、防除に努める。
- オ. 薬剤散布は、日中の高温時には薬害の恐れがあるので、夕方の温度が下がった時間に行う。なお、薬剤散布に先立って灌水しておくこと、薬害の発生を少なくすることができる。

果樹

- ア. 1998,2001,2005年と同じような気象の経過をしているので、急激な水分変化や高温で発生する、ユズの凹型コハン症、ブントンの果頂部コハン様症、新高ナシのミツ症などの生理障害の発生に注意する。（「1998年の果樹」など参照）
- イ. 敷き草などを十分行い、土壌表面の蒸散防止と保水に努める。
- ウ. 灌水は日中を避け気温の下がった夕方に行う。灌水量は1回あたり20mm程度、5日間隔を目安とする。少ない水を効果的に使用するには、点滴灌水を行うと良い。
- エ. 害虫の多発が予想されるので、適切な薬剤を用い防除を行う。（上記オ参照）

※ 今後の正確な対応の参考のため、被害の状況や対策、結果は、極力写真やデータなどで記録しておく。